

新陰流 水月

高井
忍

本作で採り上げたエピソードは剣豪諸岡一羽の門下、岩間小熊、根岸兎角の相克とその顛末。同じ題材の作品には藤沢周平先生の「師弟剣」、早乙女貢先生の「火吹く微塵流」、朝松健先生の「輝風戻る能はず」等々があり、ミステリ仕立てに描いた先例ということでは池波正太郎先生の「秘伝」が挙げられるでしょうか。表題並びに作中の柳生十兵衛の発言は、いちおう新陰流の『兵法家伝書』が出典ですが、直接的には山田風太郎先生の忍法帖シリーズ『魔界転生』『忍者月影抄』からの引用。忍法帖といえば『忍法剣士伝』にも諸岡一羽と弟子たちが登場していましたね。同一の題材をどう脚色するのか。読み比べるのも一興でしょう。

高井 忍（たかい・しのぶ）

1975年京都府生まれ。立命館大学卒。在学中は推理小説研究会に所属。2005年「漂流巖流島」で第2回ミステリーズ！新人賞を受賞。2008年、同作収録の『漂流巖流島』で単行本デビュー。歴史上の事件を題材にしたミステリを得意とする。著書に『柳生十兵衛秘剣考』、『柳生十兵衛秘剣考 水月之抄』、『本能寺遊戯』、『蜃気楼の王国』など。

然れども兎角の門人、潜かに之を害して、師の讎を報ぜむと欲す。相謀りて小熊をして浴室に入らしめ、甚だ熱して其の正氣を失はしむ。小熊、漸く浴室を出でて倒る。此に於て遂に斬殺す。

——『干城小伝』

一

文禄二（一五九三）年の秋九月——というから、三河の国から移ってきた徳川家康が江戸城に入り、まだ三年余りしか経っていない。

かつて太田道灌が攻守の要害として築いた武蔵の国江戸城は、この頃にはすっかり荒廃してしまつて

いる。城のすぐ外まで入り江がえぐれて、周辺はただ茫洋とした葦原に潮の匂いが漂うばかり。新しい町の建設に新領主家康は精力を傾け、江戸の空からは槌音の響きが絶えない。住人の数も増えて、城門前の表通りはさすがに賑やかだが、裏手にまわるとあちらこちらに野ツ原や雑木林が目についた。急ごしらえの家々はほとんど小屋がけも変わらない。

この月下旬の某日、大手門外を流れる平川の兩岸に早朝から黒山の人だかりができた。奉行所からも人数が出て、弓、槍を持ち、橋の東西を固めている。江戸城の土居の上にも見物の人影が立ち並んだ。この時は城主の家康も櫓から見下ろしていたらしいと、後でたいそう評判になった。

橋の西側で、わつと歓声が上がった。

「小熊だ」

「あれが、岩間小熊——」

ややあつて、見物の人だかりを掻き分けるように進み出た人物は、五尺（約一五〇センチメートル）

に足らない小兵で、丸々と太つていて、顔の色は浅黒く、蓬髪ほうはつ、ぎよる目、頬髯ほげの濃い、名前そのままの小熊のような男である。鼠色の木綿もめん袷あわせに浅黄の袴をつけて、足半あしなかという短い草履ぞうりをつつかけていた。

「常州牢人、岩間小熊でござる」

役人たちに向かい、分厚い胸を張つて名乗りを上げる。この月の十五日、同じ橋のたもとに高札を立てて、武芸に覚えのある者はただちに自分と勝負せよといった趣旨の文言をかかげたその末尾に、

〈日本無双岩間小熊〉

とはなはだ挑発的に書きつけたのが、見るからにうらぶれた風体のこの人物だった。

岩間小熊は腰の大刀を外して役人に渡し、定寸の木刀を引つ下げて橋のたもとにたたずんだ。相手の到着を待つ間にも、見物の人の数はいよいよ増えていった。

今度は橋の東側でどよめきが広がった。

どよめきの渦はだんだん橋のたもとに近づいてきて、やがて、恐ろしく背の高い、魁偉かゐいな男の姿形を送り出した。対岸に小熊の姿を認めるなり、彼は足を止め、割れんばかりの大音声で呼ばわった。

「微塵流根岸兎角、ここにあり！」

この頃の江戸の住人で根岸兎角の名前を知らない者はない。天狗の化身といわれて評判の武芸者である。門人の数はすでに百人以上。徳川家の侍も多数入門しており、剣術指南役に推輓すいばんする声も上がっているらしい。先の高札について伝え聞くと、彼は小癩しかに思い、

〈愚人夏の虫飛んで火に入るとは小熊なるべし。たゞ一打に我打ち殺し諸人に見せん〉

早速奉行所に仕合の許可を願ひ出て、この日の対決を迎えた。

根岸兎角という男は、山伏風の垂髪すいはつに鼻梁高く、鑿のみで荒削りしたような風貌はまさに天狗そのもの。当日の姿恰好は太い縞の小袖しろだすきに白襷しろたすきをかけ、黒縹しゆ

子のくくり袴、黒脛はばき巾と草鞋で足下を固めるといふものだった。大刀はやはり役人に預けたが、手にした得物は六角の長大な棒に鉄鋌を打ちつけ、筋金を通していて、殺傷力は真剣に劣らない。

検使の合図を待ち、橋の両端から二人は歩み寄つた。

群衆の聲がたちまちやんで、一帯はしいんと静まり返る。さらさらと水の流れる音ばかりが耳についた。

「兎角、いかに」

小熊が立ち止まり、左手で額を撫でつつ声をかけた。

「されば」

頬髻に手を当てて兎角も応じる。

……この時、役人のうちの年配者が近くの同僚に囁きかけ、

「すわ、兎角負けたり」

「まさか」

「いや、見るがよい。身体のどこを撫でたかで土気の高下こうげは明らかじゃ」

こんな会話が交わされたことを諸書は伝えるが、これはいかにも後づけの理屈臭い。

それぞれの得物がすうつと持ち上がり、大男の兎角は上段に、小兵の小熊は下段につけた。互いの呼吸をうかがうこと、暫時——

「いえい」

「うらあ」

裂帛れちぼの気合に喉を震わせて両人は踏み込み、ひと跳びに間合を詰めた。

頭上に巨大な円弧を描いた六角棒を、兎角がぶんと叩きつける。小熊は真つ向から打ち合わせた。秋の陽の下に剣戟けんげきの音が高らかに鳴って、次の瞬間、がつきと噛み合った得物はそのまま宙を動かず、兎角と小熊は三尺の近さで顔を合わせた。

「昔の兎角と思うなよ」

両の目尻を吊り上げて兎角が喚く。

「いいや」

満面朱をそそいだような小熊の顔に唇だけが笑いの形に歪んだ。

「何が微塵流だ。この増上慢め。名ばかりを変えたところで、お主の太刀遣いは昔のままの諸岡一羽流じゃないか」

「放言を！」

鏢迫り合いはそこで終わって、六角棒と木刀が弾かれるように左右に離れ、再び鋭い音を立てて激突した。

五合、六合と打ち合いが続くうち、体格と強力でまさる兎角が徐々に小熊を押し去っていった。巨体ごと上から圧しかかり、荒波が狂い立つように打ちかかるのに、守勢一方の小熊は、ズズ、ズズ、と押し切られる形で後ろへ退いていく。

「覚悟はできたか！」

兎角は大喝すると、高々と六角棒をかかげ、小熊の脳天めがけて振り下ろした。

ただひと打ち、これは岩石をも砕き割る勢いと皆の目には映じたが、頭上三寸（約九センチメートル）、斜めに木刀をかざして小熊は受けた。強引に兎角は押した。六角棒と木刀を交叉させたまま、二歩、三歩と小熊は押されて下がった。

兎角の勝ち——

見物衆が沸いた。と思いきや、両者の身体はくりと輪を描いて、押し去ったはずの兎角が、橋の欄干に押しつけられる形になった。

「げっ」

兎角の異相を驚愕が刷いた。

小熊はこの虚を逃さない。ひよいと身体を沈め、兎角の片足をつかんで、力任せにすくった。欄干は大男の兎角の腰ほどの高さしかない。たちまち兎角の身体は欄干を越え、頭から逆さまに川の流れに落ちていった。

ざんぶと音を立てて水柱が上がった。

一、二拍、沈黙が続いた後、川の東西から拍手と

喝采が起こつた。予想外の小熊の勝利を賞賛するものだった。

いっぱいいっぱいの歓声を浴びて何を思ったか、この時、

小熊は木刀を投げ捨てると、

「南無八幡、これを見よ！」

小刀を抜くなり、ちやうど兎角が落ちた辺りの欄干に叩きつけた。それきり石像のように動かないで、長い時間、彼は刀身を打ち下ろしたままの姿勢でいた。

欄干の刀痕は、明暦三（一六五七）年の大火の頃までは確かにあつたと伝わっている。

二

王城守護の靈峰比叡山の西の麓、ちやうど雲母坂の登り口に差しかかる地域にかつて一乗寺という寺院があつた。天台宗寺門派園城寺の別院という。南北朝動乱の戦火に焼かれて再建もなされず、それ

きり廃寺となつてしまつた。後世には一乗寺の地名ばかりが残っている。

京の都から高野川を挟んで続いてきた街道が、白鳥越え、今道越えの二つに分岐する追分の高台に、折れそうなほどに湾曲した松の古木がぽつんと聳えている。春空に張った枝がまるで針山を見るようだ。平安朝の往時から旅の道標に植え継がれたと伝わっており、由緒来歴の正しさは相当のもの。地元の人々はこれを下がり松と呼びならわしてきた。すなわち、一乗寺下がり松——

「しかし、何もない野ッ原だ」
寛永八（一六三一）年、春。

三月半ばの某日、下がり松の下からぐるりと視線をめぐらした若い男が、苦笑に頬を緩めるように無粋な感想を述べた。

深編笠の下には色の浅黒い、精悍な面構え。暗褐色の小袖に真つ黒の野袴、これも黒いぶつきき羽織を長身にまとい、両手に手甲、左腰に大小の刀、背

中に網袋を斜めにくくりつけた旅の装いは、ひと目でそうと知れる、廻国修行の武芸者だ。

柳生 十兵衛、というのがこの男の名前だった。

「茶店くらいはあるかと思つたが」

ぼやき混じりに彼が口にする、

「あちらに屋根が見える」

同じ松の下に並んだもう一人が目敏く見つけ、東の方角を指差した。

色白で人形のように整つた顔の造作に似合わず、深編笠に大小の刀、袖なし羽織に裁つつけ袴をつけて、こちらも見ることから武芸者風だが、頭一つ分ほど連れよりも背が低いから、横に並ぶと、すらりと細い身体つきに両肩や胸の薄さが余計に目立つ。

名前を毛利玄達という。この人物、ただの武芸者ではない。女である。男装の女武者ということになる。女武者は男姿を装い、立花闇千代、井伊直虎、長尾景虎というように男名前を名乗つた。いまや合戦の絶えて久しい偃武の時世、女武者の存在が必要

とされることはほとんどなくなつたけれども、男装、帯刀、男名前の習俗は武芸を修めた女たちの間に残つていた。

「神社のようだな」

小手をかざして十兵衛も、緩やかに起伏する野原の向こうを望んだ。

「すると、あれがそうか。決闘を前に宮本武蔵が押込んでいったのは——」

「押んではない。神頼みにすぎるのは心の弱さがあるからだ、武蔵先生は神前に立つたところで思い留まられたんだ」

「本当の話かね。賽銭も供えものもなしにお願いごとをするのは誰だつて気が引ける。案外、いざ押まんとする時になつて、小銭の持ち合わせがないことに気づいただけかもしれないぞ」

深編笠が斜めに傾いた下にちらつと白い歯が覗き、「せっかくだから、武蔵の分まで押んでいくか」

「神前に何を祈願するつもりだ？」

「武芸上達」

「……神頼みなのか、十兵衛は」

下がり松の下を離れて、柳生十兵衛と毛利玄達は連れ立って神社に向かった。

「しかし、本当に何も無い野ッ原だな」

十兵衛が再び口にした。

大詩人石川丈山が詩仙堂を建てるのはちようど十年後である。臨濟宗南禅寺派の圓光寺が洛中から移転してくるのは三十六年後である。寛永八年当時、一乗寺下がり松の周辺はただ見晴るかす限りの荒れ野といってよく、唯一、この地域の産土神の八大神社が東の外れに鎮座するくらいだった。

時々、思い出したように野鳥が囀り、風に揺れて草木がさんざめくのが、かえって静寂の感を深めるようだ。

「武芸者、上手の遣い手同士が勝負したという話は、なるほどいつときは世の人の興味を惹きつけ、話題になるが、十年が経ち、二十年が過ぎてなお話

り継がれるものとなると案外に数が限られる。そうだな、ぱつと思いつくのは……塚原卜伝と薙刀遣いの梶原長門の対決。伊東一刀齋と唐人十官の対決。諸岡一羽門下、根岸兎角と岩間小熊の同門対決。上州烏川河原における、念流八世樋口又七郎と村上天流の対決。これは軽い手合わせだが、俺の爺さまが初めて上泉伊勢守さまに引き合わされた時、上泉門下の匹田小伯どにあっけなく打ち負かされて、ただちに新陰流に入門した故事も世上に知られているな」

そこでいったん言葉を切ると、十兵衛は周辺に目を走らせた。

「そして、ここは一乗寺下がり松——円明流宮本武蔵と室町兵法所の決戦場だが、さすがに三十年近くが過ぎると、昔日を偲ぶよすがは何もない」

天下分け目の関ヶ原合戦から四年を経た慶長九（二六〇四）年——当時無名の宮本武蔵玄信が京に現れ、室町兵法所、かつての足利將軍家の御流儀と

してなお盛名高い吉岡よしか一門に果敢に挑んで、三度にわたる決闘を勝ち抜いた武勇譚は世上に稀な大椿事ということでいまも盛んに喧伝されている。

三度目の決闘の場所が、ここ、洛東一乗寺の野原で、この時、ただ一人の仇敵武蔵に備えて吉岡一門が召集した門人の数は三、四十人余——あるいは八十人以上とも——弓や鉄砲まで持ち出して必殺の陣を構えたと伝わるから、武芸者同士の決闘というより、もはや小合戦の様相だ。

それから二十七年。洛北の貴船神社きふねを詣でた帰りの武芸者の二人連れが、どのみち急ぐ用件もないからと、東にまわり道して、宮本武蔵対吉岡一門の栄光の戦跡にこうして立ち寄ったのだった。

「もつたいない話だ。十年二十年どころか、武蔵、吉岡の戦いはずっと後の世まで語り継がれる。有名な決戦場をひと目見ておきたいと、俺たちのようにやつてくる見物人は多いはず。酒なり茶なり、せんべいなりを出して、馳走しようと考える者はおらん

のか」

「こんなところで商あきないになるか」

「山越えの者らも寄つていくだろう。武蔵ゆかりのせんべいとも宣伝したら、珍しがられるぞ。団子やまんじゅうでもいいな」

「勝手なことを」

「ここで落命した吉岡勢の供養に石塔の一つも建ててはどうか。皆が手を合わせていくことになる。ついでに決闘の顛末を絵草紙に仕立てて、売り出してもいい。天下の劍豪武蔵は、いかにして八十人の敵勢と戦つたのか——旅の土産に喜ばれるとは思わな

いか？」

「本心でいつているのか、十兵衛？」

「兵法の上のことで嘘はいわんさ」

八大神社の前に差しかかった。何の気なしに眺めるなら、どこの田舎でも見かけるような、閑散とした神社のたたずまいでしかない。

「お侍、お侍」

後ろから呼びかける声が、二度あった。

十兵衛と玄達は揃って振り返ると、深編笠の縁に指先をかけて持ち上げた。西の方角から、まつすぐこちらに走ってくる人影が三つある。女が一人。さらに後ろにはどうやら牢人らしい男が、二人――

「いまの声は俺たちを呼んだのか？」

「そのようだ。他に人の姿もないからな」

見る間に女は二人の前に迫り、二間（約三・六メートル）を隔てて立ち止まった。

年の頃は十四、五。化粧気のない、少年のような顔立ち。はちよつと猫に似て、両目が大きく、秀でた額につんとした鼻筋、頭に巻いた手ぬぐいの端から黒髪を肩まで垂らし、猫は猫でも、野生の山猫のような精気があった。全体の輪郭が細くて小さくて、そのくせ袖や裾から手足がしなやかに伸びているところも猫を見るようだ。

河内木綿の紺の衣を裾短すそみじかにか着て、掛け襟にゆるりと襷をかけ、長手ぬぐいの両端を左右の肩から垂

らしている。半分に袂たもとを折った烏袖、御所染めの細帯に三中の前掛けという装いは、白川女しろがわめ――もつぱら洛東の野山で花々を摘み、都大路に行商する花売り女たちに独特のものだ。古くから洛東白川は花の名所として知られており、藤蔓ふたぢづるで編んだ箕みに花束を盛り、頭に載せて売り歩いた彼女たちの姿は、洛北から出て柴木かづらめを売る大原女おおはらめ、洛西から出て川魚や飴菓子あめを売る桂女かづらめと共に、京の都を優美に彩る風物といつてよかつた。

もつとも、たつたいま十兵衛と玄達の前に走り込んできた白川女は、頭に載せるはずの箕を胸に抱き、ぜいぜい息を切らして、優美な印象からはほど遠い。

華奢きんしやな身体をくの字に折りつつ、娘は二度、右から左へ首をめぐらした。十兵衛と玄達の姿形を見比べたのである。初めに二人のうちのどちらが頼もしいか、次にどちらが信用できるかを判断するよう